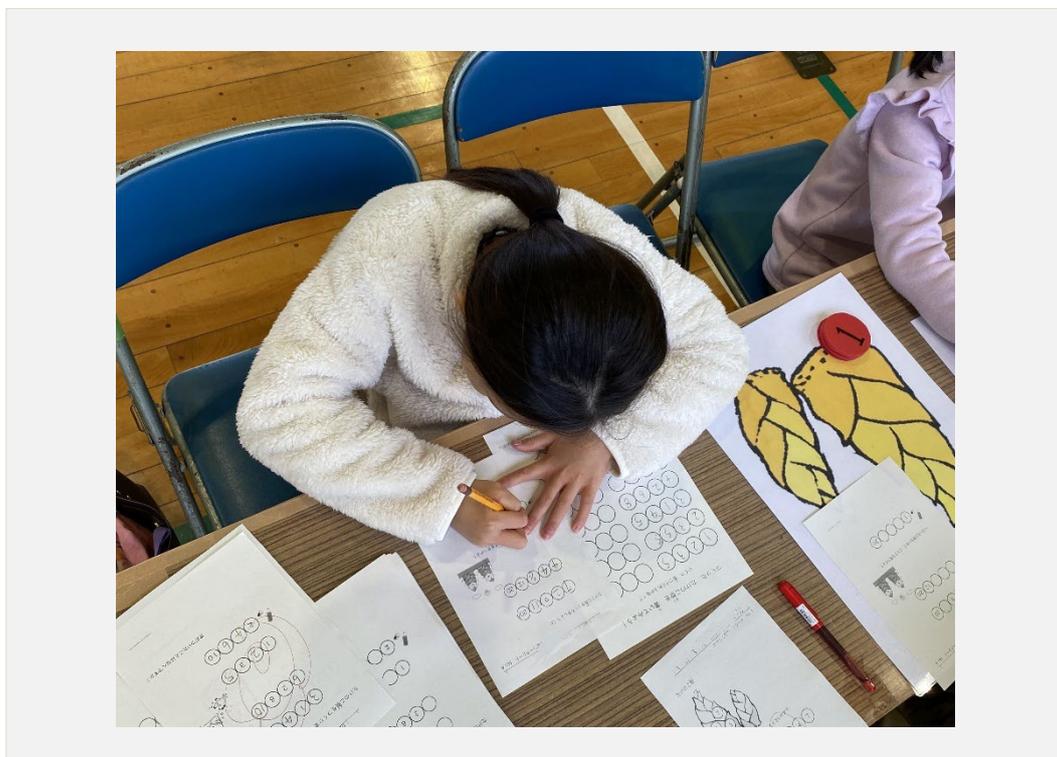


Teaching Portfolio

2025



第 34 回 佐賀大学 ティーチング・ポートフォリオ・ワークショップ
2025 年 3 月 17 日 (月) ~ 19 日 (水)

佐賀大学 所属 教育学部
氏名 大林将呉
obayashi@cc.saga-u.ac.jp

内容

1. 教育の責任	1
2. 教育の理念	2
2.1. 理念1 自律的な教員の育成	2
2.1. 理念2 協働的な教員の育成	3
2.2. 理念3 創造的な教員の育成	3
3. 教育の方法	4
4. 教育の成果・評価	6
4.1. 自律的な教員を育成する	6
4.2. 協働的な教員を育成する	7
4.3. 創造的な教員を育成する	8
5. 今後の目標	9
5.1. 短期目標	9
5.2. 長期目標	10
5.2.1. 現場の先生方の「自律的・協働的・創造的な教師力」を高める	10
5.2.2. 地域に貢献する	10
6. 添付資料・参考資料	11

1. 教育の責任

佐賀大学では、専門分野の知識の修得とともに、幅広い教養、他者との協調性、主体的に学び行動できる力、地域が抱える課題を解決できる力等を育成するための教育に力を注いでいる。特に、VUCA の時代と言われる現代において、2030 年に向けて佐賀大学は3つの目指す大学像を設定している。1つ目は、学生、卒業生、教職員といった本学に関わる人々が自信を持って誇れる大学、2つ目は、受験生に限らず学問を追究する人々が本学で学びたいと率先して選びたくなる大学、3つ目は、企業、自治体、市民等を含む地域社会から本学ならば必ず期待に応えてくれると信頼される大学である。予測困難なこれからの社会を生き抜くだけでなく、自ら社会をよりよくしていく人材の育成が大学教育に求められている。(資料(1)(2))

筆者が所属している教育学部では、幼児・児童・生徒の心身の発達を長期的な視点から見据えながら、現代社会の変化にともなうさまざまな教育課題に応えることができる教員の養成を目指している。

設置されている「幼小連携教育コース」「小中連携教育コース」の双方とも、「学びの連携」を重視し、幼児期から児童期へ、児童期から青年期へと成長していく子どもたちの発達を一貫的で連続性のある学びとして捉えることのできる教員の養成を目指している。また、変化が激しく、多様性が求められるこれからの時代にふさわしい高度な指導力の育成を重視していることも大きな特徴である。(資料(3))

これらのビジョン・目的のもと、自律的・協働的に問題を解決することができる教員の育成を目指して、次の授業科目を担当している。

	科目名	授業人数、学年、種別
教育学部	算数科教育法	125人、学部2年、必修
	数学科教育法Ⅰ	20人、学部2年、必修
	数学科教育法Ⅳ	20人、学部4年、選択
	大学入門科目	20人、学部1年、必修
	教育実践フィールド演習Ⅱ	10人、学部2年、必修
	教育実践フィールド演習Ⅲ	10人、学部3年、必修
	小中連携教育学	10人、学部3年、必修
	コンピュータ	5人、学部2年、必修
	教職実践演習	20人、学部4年、必修
大学院	教科教育の理論と実践	5人、修士1年、コース必修

2. 教育の理念

現在、学校現場は、学力格差の拡大、いじめや不登校の増加、特別支援が必要な児童生徒への対応など、多様な課題が複雑に絡み合っている状況である。また、少子高齢化や家庭の多様化、デジタル社会の進展により、子どもたちが直面する環境も大きく変化している。こうした現状を踏まえ、すべての子どもが自らの可能性を最大限に発揮できる教育環境の構築を目指すことが重要である。そのために、教員には単なる知識伝達者ではなく、子ども一人ひとりの個性や能力を尊重し、多様性を受け入れながら共に学び成長する姿勢が求められる。さらに、情報リテラシーや批判的思考力、コミュニケーション能力など、現代社会を生き抜く力を育む教育も不可欠である。

このように、多面的かつ複雑な学校現場で活躍することができる教員としての資質や実践的な指導力を備えた教員を育成するために、私は「自律」「協働」「創造」の3点を重視した教育活動を行っている。以下ではこの3点を中核として自らの教育理念について述べる。

2.1. 理念1 自律的な教員の育成

上述したとおり、現代の教育現場では、家庭や地域社会の多様化やデジタル社会の進展を背景として、学校の教員には高いレベルの対応が求められる傾向がある。そのような状況において、大学で学んだ知識のみを基にして教員生活を全うすることは不可能であり、授業力の向上をはじめとして継続的な自己研鑽を行い続ける「自律的な教員」の養成が求められている。そのためには、計画 (Plan)、実行 (Do)、評価 (Check)、改善 (Act) を繰り返す PDCA サイクルを意識し、日々の授業や学級経営を振り返りながら指導法を改善していく姿勢が重要となる。

しかし、実際にこのような意識を持って教育活動を行っている教員は決して多くはない。例えば、教育の情報化が進む現代において、ICT の活用や多様な指導法の習得が求められる。目の前の子どもたちは、デジタルネイティブを越えて AI ネイティブとも言える世代であり、Society5.0 の社会もしくは Society6.0 の社会を生き抜かなければならない。当然授業のスタイルも変化しているはずであるが、授業を参観すると、知識を教え授ける前時代的なスタイルであることは珍しくない。その原因の1つは「授業」をイメージするときに「自分が受けてきた授業」がベースになっているためであると考えられる。未来を担う子どもたちのために「授業観」を更新し続けることができる教員の育成が求められる。

教員として活躍し続ける人材を育成するためには、こうした力を育むための理論と実践のバランスが重要である。そのような自律的な教員の育成を通じて、より良い学校教育の実現を目指すことが、教育学部の教員に求められていると考える。

2.1. 理念2 協働的な教員の育成

上述の通り、現代の教育現場には多種多様な教育課題が存在しており、従来の「学級王国」と呼ばれるような、一人の教員が自分の学級を独自の方針で運営する考え方では、複雑な課題に十分対応できない。そこで、学校全体で連携しながら児童生徒を支援する「チーム学校」という考え方が重要であり、学校にいるスタッフの得手不得手をお互いに補い合いながら教育環境を整備することが求められる。

まず、教員同士の連携として、学年部や学年主任への相談が挙げられる。いじめや保護者からのクレームなどに対しては個人で対応せず複数人で対応することが重要である。そのためにまず学年部の先生や学年主任に相談し、学年部で話し合うことで、より適切な対応が可能となる。また、事案が大きかったり深刻であったりする場合には、管理職への相談と連携も重要である。若手の教員は特に問題を軽視したり放置したりしがちである。できるだけ早い段階で校長や教頭に相談し、校全体の視点から助言・協力をしてもらうことが、問題の早期解決や、適切な処理につながる。さらに、関係機関との連携も不可欠である。スクールカウンセラーや特別支援コーディネーター、地域の福祉機関、医療機関と協力することで、児童生徒一人ひとりに応じた支援が可能となる。特に、不登校や発達障害を抱える児童生徒への対応には、学校だけでなく、家庭や地域社会と協力しながら、包括的な支援を提供することが求められる。

これらのことは、いじめ問題等の学級経営に関する事だけではなく、授業などの学習指導についても同じ事が言える。経験豊富な先輩の先生方や地域の多様な人材の協力を積極的に得ることで、子どもたちにとってよりよい教育環境をデザインできるような、協働的な教員を育成していきたい。

2.2. 理念3 創造的な教員の育成

予測困難な未来を生き抜く子どもたちを育成するためには、ここには無いものを創り出すことができる創造的な教員の育成が求められる。これまでの教育では、前年踏襲型の指導方法が一般的であったが、社会の急速な変化に対応するためには、新たな価値を生み出す教育が必要であり、そのための指導方法を自ら創り出す必要がある。特に、AIの進化により、従来の知識を習得するだけではなく、創造力や問題解決能力、柔軟な思考力を身につけることが子どもたちに求められている。そのため、教員自身が創造的に学び、変化に対応する力を養うことが不可欠となる。

そのような創造的な教員を育成するためには、大学の教員にも教育方法の見直し求められる。従来のように、前年踏襲型かつ講義型の授業を繰り返すのではなく、ICTを活用した新たな学習方法を取り入れたり、学生が教材を開発するなど主体的に探究する授業を設計したりすることが重要である。例えば、プレゼンテーションソフトの共同編集機能を活用しながら教材を創り出す活動を設定したり、与えられたテーマに沿って学生自身が講義を計画・実行したりするような授業が考えられる。

一方で学校現場に目を向けると、創造的な教員の育成を考える上で、教員の働き方改革も重要な課題となる。長時間労働が常態化している現状では、新たな教育方法を考えたり、創造的な実践を行ったりする余裕が生まれにくい。そのため、業務の効率化やICTの活用による負担軽減を進め、教員がより柔軟に授業をデザインできる環境を整えるなど、教育の質を保ちつつ、自らの適正な労働時間を維持するようなワークライフバランスを創り出すことも教育実習などを通して意識させていきたい。

3. 教育の方法

筆者は、前述の理念を達成するために、次の①～⑤の5点を教育方法の視点として授業を行っている。それぞれの方法と教育理念との対応は、表1に示すとおりである。

表1 教育の理念と教育の方法の関係

	①自己選択・自己決定	②協働的な活動	③開発	④アウトプット	⑤振り返り
自律的な教員	3.1.1.模擬授業作り 3.1.2.個人研究発表			3.4.1.授業中のインタビュー	3.5.1.模擬授業の実施
協働的な教員		3.2.1.チームでの授業作り 3.2.2.チームでの講義運営			3.5.1.模擬授業の実施
創造的な教員			3.3.1.サロンへの準備	3.4.2.教材作り	

3.1. ①自己選択・自己決定の機会を与える

この方法は、学生の自律性を高めるために取り入れている方法である。教育学部の学生は型にはまった受け身の学生が多いように感じている。そのため大学では「教師として自分はどうのような行動をとるべきか」を意識して欲しいと考えている。授業では、演習の中で、教材の選択、教具の選択、学習形態の選択、発表形態の選択などによって、自己選択・自己決定の機会を与えている。

3.1.1. 模擬授業作りを通した自己選択・自己決定

算数科教育法や数学科教育法では、演習として指導案の作成、模擬授業、授業研究会を行っている。

自分で指導案を考える際には、教材（教具、場面など）や学習形態（ペア、グループなど）の工夫について重要なポイントをキーワードとして簡潔に提示することで、大切なことを取りこぼさずに学生が自由に選択できるようにしている。

3.1.2 ②個人研究発表を通した自己選択・自己決定

大学入門科目では、演習として個人研究発表を行っている。内容は、学生に自分が好きなことやマイブームについてリサーチクエスチョンを立てさせて文献やインターネットを用いて調べさせ、データを分析・考察し、まとめたものをプレゼンするというものである。この活動を通して、学生は、テーマ、根拠となる資料、分析方法、発表方法などについて自己選択・自己決定の機会を得ることができる。（資料(4)）

3.2. ②協働的な活動の機会を与える

上述の通り、現在の学校現場は社会の情勢が反映された複雑なコミュニティーが形成されている。社会に出る前に協働的に活動に取り組むためのスキルを磨くために、チームで課題に取り組む機会を設定している。

3.2.1. チームでの授業づくりを通じた協働的な活動

フィールド演習Ⅱにおいては、ゴールとなる「代表者1名による実習校での実地授業」に向けて、5~6人のチームで1つの授業を協働的に作成する。その際、初めから授業者が決まっていると授業者以外の意識が他人事になりかねないので、授業2週間前に授業者を決める。(資料(5))

3.2.2. チームでの講義運営を通じた協働的な活動

教職実践演習では、毎回学生の中からDL(デイリーダー)を決めて各回のテーマに沿って学生が主体で講義を進める形態を採用している。その際、DLを2人以上にすることで、話し合いながら授業の流れを決めたり、授業内で協力して司会進行を行えるようにしたりしている。また、授業内で必ずグループでのディスカッションを設けるようにしている(資料(6))

3.3. ③開発の機会を与える

時代の流れに対応しながら変化し続けることができる教師を育成するために、教科書にある教材をそのまま授業化するのではなく、自作の教材をもとに授業を構成したり、面白い教材を開発して教育イベントで活用する場を設定したりしている。

3.3.1. 算数・数学サロンへの準備を通じた開発する機会の設定

小中連携教育学では、「算数・数学サロン」で出展する教材の開発を行わせている。「算数・数学サロン」とは、米田・大林研究室が主催する小中学生を対象とした出張型のワークショップであり、算数・数学に関する面白い教材を子どもたちが実際に体験することで、算数・数学に対する興味・関心を高めることを目的としている。教材の開発における視点として、「楽しいこと」「数学的なパターンがあること」「学年をまたぐ拡張性・発展性があること」を与えて教材開発をさせている。(資料(7))

3.4. アウトプットの機会を与える

一般的に、講義中心の授業を行った場合、学生が静かに聞いているからといって本当に理解しているとは限らない。人間は自らの意見を表出する時に初めて考え始める。授業中にランダムで発言を求めたり、ペアやグループで話し合わせる機会を設けたりしてアウトプットさせるようにしている。

3.4.1 授業中のインタビューによるアウトプット

算数科教育法などの講義中に、学生にとって意外な結果となっている全国調査の結果などを取り上げて、結果を予想させて挙手させている。また、長方形の定義や、割合の

種類などについて学生の素朴概念を引き出すためのインタビューを行っている。また、指導案作成中に優れたアイデアを用いている学生にインタビューしたり、周りの学生同士でアイデアを共有させたりすることで、アウトプットする機会を設けている。(資料(8))

3.4.2. 教材作りを通じたアウトプット

小中連携教育学の授業内で開発した教材はプレゼン大会を行うことで精選し、さらに改善してワークシートと解説書という形でアウトプットさせている (資料(9))

3.5. ⑤振り返りの機会を作る

授業内で、開発した教材を基に指導案を作成したり、模擬授業を行ったりする事は大切であるが、やりっぱなしになっては、その後に繋がらない。習得した知識と共に、学習過程（協働的に学ぶ事の価値など）について言語化する機会が必要である。そのために指導案の作成で工夫した点をレポートに書き残させたり、模擬授業の後に授業反省会を設定して学生同士で相互評価させた結果を書き残させたりしている。

3.5.1. 模擬授業の実施過程における PDCA サイクルを意識した振り返り

算数科教育法や数学科教育法では、演習として模擬授業を取り入れており、その流れは次の通りである。

「手本をもとに指導案作成→自分で考えて指導案作成→模擬授業→授業研究会→指導案の改善」

このように、模擬授業を実施する家庭に自己評価と他者評価を組み込むことで PDCA サイクルを回し、授業改善の過程を経験させている。また、数学科教育法 I を受講した学生の多くが数学科教育法 IV も受講する。演習を同じ流れで行う事によって、PDCA サイクルをより強調して自覚的に回させるとともに、数学科教育法 I で行った授業と数学科教育法 IV で行った授業を比べて良くなった点を講評時にフィードバックするようにしている。(資料：(10))

4. 教育の成果・評価

4.1. 自律的な教員を育成する

4.1.1 「大学入門科目」を基にした分析

「大学入門科目」における発表課題と「学生による授業アンケート」の結果を用いて分析する。

まず、発表課題に関しては、受講者全員が自らの興味・関心に基づくテーマを自己選択し、リサーチクエスチョンに基づく探究を行い、まとめた上でプレゼンを行う事ができた。未発表者はおらず、全員が PDCA サイクルを意識した活動ができていた。(資料(4))

次に「学生によるアンケート」について分析する。「この授業では、学生が主体的に学べるよう他者と一緒に「書く」、「話す」、「発表する」といった活動が行われていまし

たか。」という質問に対しては、平均 4.550 ポイント（学部平均 4.02 ポイント、全体平均ポイント 3.966 ポイント）と学部平均、全体平均を大きく上回る結果となった。また、「この授業の学習到達目標を達成できましたか。」という質問に対しては、平均 4.211 ポイント（学部別平均 4.076、全体平均 4.100 ポイント）と 1 ポイント以上上回る結果となった。（資料(11)）

4.1.2 数学科教育法Ⅳを基にした分析

「数学科教育法Ⅳ」において作成された指導案と「学生による授業アンケート」の結果を用いて分析する。

まず、指導案に関しては、全員が「手本をもとに指導案作成→自分で考えて指導案作成→模擬授業→授業研究会→指導案の改善」というサイクルを経た上で赤書き修正されたものを提出することができた。また、数学科教育法Ⅰで作成した指導案と比較してみると、数学科教育法Ⅳで作成したもののほうが「子どもの具体的な反応が書かれている」「図や表を用いる場面がある」「指導上の留意点に目的と手段が明記されている」などの点でよりよいものとなっていた。（資料(12)）

次に「学生によるアンケート」について分析する。「この授業では、学生が主体的に学べるよう他者と一緒に「書く」、「話す」、「発表する」といった活動が行われていましたか。」という質問に対しては、平均 4.571（学部別平均 4.147、全体平均 3.966）と学部平均、全体平均を大きく上回る結果となった。また、「この授業の学習到達目標を達成できましたか。」という質問に対しては、平均 4.40（学部別平均 4.248、全体平均 4.100）とこちらも学部平均、全体平均を大きく上回る結果となった。（資料(13)）

4.1.3. 考察

「大学入門科目」及び「数学科教育法Ⅳ」の成果物から、学生は活動の中で PDCA サイクルを回し、主体的によりよい成果物を作成することができた。また、学生アンケートの結果から、教員が設定した学習環境を土台にして、学生が主体的に学習を進めた結果、自らの学習目標を達成できたということが推察される。したがって、これらの結果から「自律的な教員の育成」という理念はこれらの講義を通して達成できていると考えられる。

4.2. 協働的な教員を育成する

4.2.1. 「フィールド演習Ⅱ」を基にした分析

「フィールド演習Ⅱ」の最終レポートに以下のような記述があった。

また、反省点も多くあったが私自身、今回の実習を終えて本当に楽しかったと感じた。どのように子どもたちに教えると分かりやすく伝わるのかをグループで考え、その意見に対する答えを大林先生、齋藤先生にフィードバックしてもらうことができ、自分の教育観が育まれているような気がした。何よりも子どもたちの前に実際に授業することが出来て一生懸命分らないことに向き合い、分からないなりに発表してくれたり、手を動かしてくれるのがうれしく教師になりたいのだと改めて実感することが出来た。友人や先生からたくさん授業についての意見を聞くことが、できいい経験が出来たと思う。

藤井レポートより

この記述からは、協働的に問題解決するよさを実感することができている様子が読み取れる。

次に「学生によるアンケート」について分析する。「この授業では、学生が主体的に学べるよう他者と一緒に「書く」、「話す」、「発表する」といった活動が行われていたか。」という質問に対しては、平均 4.500（学部別平均 4.281、全体平均 4.000）と学部平均、全体平均を大きく上回る結果となった。（資料14）

4.2.2. 「教職実践演習」を基にした分析

「教職実践演習」の最終レポートには、講義を受講した全員が「相談すること」「連携すること」「チームで対処すること」などの価値について書いていた。以下はその一例である。

た。社会人になって仕事を始めてからは、今のアルバイトよりも責任という重みが増す。そこで分からないことをそのままにしているのは、先輩や同僚、会社に迷惑をかけてしまうことになるため、分からないことを分からないとはっきり言えるようになりたいと本講義を通して強く感じた。周りの人に聞いたり相談できる力を身に付けることが今の自分には求められると考える。

力武レポートより

次に、「学生によるアンケート」について分析する。「この授業では、学生が主体的に学べるよう他者と一緒に「書く」、「話す」、「発表する」といった活動が行われていたか。」という質問に対しては、平均 4.833（学部別平均 4.281、全体平均 4.000）と学部平均、全体平均を大きく上回る結果となった。（資料15）

4.2.3. 考察

「フィールド演習Ⅱ」及び「教職実践演習」のレポートから、学生は講義の中で協働的に問題解決する活動を通して、友達や教師と協力することの良さに気づき、現場に出ても協働的に問題解決に取り組もうとする意識が芽生えていることが読み取れる。また、学生アンケートの結果からも、講義の中で他者と一緒に活動に取り組む事ができたことが明らかであり、教員が設定した協働的に活動する場が効果的に作用していたことが分かる。したがって、これらの結果から「協働的な教員の育成」という理念はこれらの講義を通して達成できていると考えられる。

4.3. 創造的な教員を育成する

4.3.1. 「小中連携教育学」を基にした分析

「小中連携教育学」におけるプレゼン大会資料と教材選考会の様子から分析する。

まず、プレゼン大会資料に関しては、受講者全員が自分だけのオリジナル教材を作ることができ、教材が満たすべき条件も3つ全てを満たすことができていた。また、プレゼン大会に関しても未発表者はおらず、その後の教材選考会においても、全ての教材を比較して4つに精選した後、それぞれのワークシートと解説書を作成することができた。（資料16）

また、「学生によるアンケート」に関しては、「この授業の学習到達目標を達成できま

したか。」「この授業では、学生が主体的に学べるよう他者と一緒に「書く」、「話す」、「発表する」といった活動が行われていましたか。」「この授業は全体として満足できるものでしたか。」という質問に対してすべて 5,000 ポイントという結果となっており、自分たちで教材を創り出したことに高い達成感を得ていることが分かる。(資料(17))

4.3.2. 「算数・数学サロン」におけるアンケートを基にした分析

「算数・数学サロン」のアンケートの記述に次のようなものがあった。

感想を自由に書いてください

子ども達の個性があり、教える側は工夫が必要で、指導する上でポイントをつかむことが少しはできたと思う。
楽しんでくれる姿がまた楽しかったと言った参加してくる子ども達を見て教材づくりに頑張ることができたと思った。

また、「運営から学生がやってもいいかも・・・」という記述も見られ、「算数・数学サロン」自体を自分たちで創り出していこうと考えている学生も見られた。

4.3.3. 考察

「小中連携教育学」でのプレゼン大会への取り組みとアンケート結果から、学生は講義の中でオリジナルの教材を創り出す活動を通して、新たな物を創り出す楽しさに気づき、ワークシートや解説書を作ることによって高い達成感を得ることができたと考えられる。また、「算数・数学サロン」のアンケートの記述から、自分たちで創り出した教材に対する愛着や、その教材を児童が楽しむことへの喜びを感じていることを読み取ることができ、教員が設定した創造的に活動する場が効果的に作用していたことが分かる。したがって、これらの結果から「創造的な教員の育成」という理念はこれらの講義・イベントを通して達成できていると考えられる。

5. 今後の目標

5.1. 短期目標

教育についての短期的な目標として、「学修者が学習到達目標の達成を自覚できる授業の実施」を挙げたい。

これまでの自分の講義を振り返ってみると、模擬授業の手本を見せたり、授業ビデオを活用したりと、学校現場での経験を生かして実践に直結する授業を行う事ができ、学生からのアンケート結果からもある程度、学生が自らの目標を達成できたことが読み取れた。一方で、全ての学生が自らの目標を達成できたと感じているかというところではない。例えば、2024年度の「フィールド演習Ⅱ」では、「この授業の学習到達目標を達成できましたか。」という質問に対して、平均 3,750 ポイントという非常に低い結果となってしまった。原因として、本講義に参加していた学生は、ほぼ数学科以外の学生であり、算数の授業づくりについての知識が不十分であったにもかかわらず、演習中心の実践的な講義内容になってしまったことが考えられる。ここには、大学教員 2 年目とな

り、前年度の講義内容を踏襲してしまったという筆者の甘えがあったと考えられる。学生に対して自律的・創造的な教員になることを求めるからには自分もそうあらなければならない。受講している学生の様子を見取り、目の前の学生の既有知識や興味関心に応じた手立てを考えて講義をブラッシュアップしていきたいと思う。そして、そのようなアプローチによって得られた成果のエビデンスをしっかりと残し、さらなる授業改善につなげたい。また、これに加えて、オンラインを活用しての授業発信や、アーカイブの作成、課題提出の簡略化などを行い、さらに学修者ファーストの授業にしていきたい。

5.2. 長期目標

長期目標に関しては、①現場の先生方の「自律的・協働的・創造的な教師力」を高めること②地域に貢献することの2点を挙げたい。

5.2.1. 現場の先生方の「自律的・協働的・創造的な教師力」を高める

大学を卒業した学生達は学校現場に出て行くことになるが、現場でも学び続ける必要がある。現在、様々な学校での校内研修や県外での講演、研究大会での指導助言などにおいて、「自律的・協働的・創造的」に授業づくりをすることの大切さをお話しし、高い評価を得ることができていると感じる。しかしまだ佐賀県での知名度が低く、佐賀県の先生方と十分に関わることができていない。そこで、3年以内に佐賀県内の全ての地区において校内研修や研究大会に関わり、講演やワークショップを通してより多くの先生方の教師力向上に貢献したい。

また、現在、自分の研究は「小学校算数における幾何学的推論の育成」をテーマにしている。この研究をベースにして今後は教師教育の分野に研究をシフトしていきたいと考えている。そこで、最低でも年に1回教師教育についての論文を書き、ゆくゆくはその論文を基にした本を執筆したいと考えている。

5.2.2. 地域に貢献する

大学に赴任して初年度から算数・数学サロンを立ち上げ、地域・学校・大学をつなぐ取り組みを始めることができた。現在は年に1回ペースで行う予定でいるが、5～10年後には佐賀市内と佐賀市外で年に計2回行い、地域の教育力の向上を加速させていきたい。それによって、学生、児童生徒、保護者、小中学校教員、大学教員を巻き込んで佐賀県の教育力向上にもっと貢献したい。そのためにも、「算数・数学サロン」を各地域で運営できるような人材を育成する必要がある。大学での講義や地域の学校に於ける校内研修、学習会などを通じて「自律的・協働的・創造的」な人材育成をしていきたい。

6. 添付資料・参考資料

(1)佐賀大学ホームページ

<https://www.saga-u.ac.jp/saga-u/index.html> (学長挨拶)

(2)佐賀大学ホームページ

<https://vision.saga-u.ac.jp/> (佐賀大学のビジョン2030)

(3)佐賀大学ホームページ

<https://www.saga-u.ac.jp/school/kyouiku/index.html> (教育学部)

(4)「大学入門科目」におけるプレゼン資料

(5)「フィールド演習Ⅱ」における模擬授業の様子

(6)「教職実践演習」におけるDLの指示

(7)「小中連携教育学」教材開発の様子

(8)「小中連携教育学」プレゼン大会の様子

(9)「算数科教育法」における講義用スライド

(10)「算数科教育法」における模擬授業の様子

(11)2024年度「大学入門科目」授業評価アンケート

(12)2024年度「数学科教育法Ⅳ」成績評価

(13)2024年度「数学科教育法Ⅳ」授業評価アンケート

(14)2024年度「教育実践フィールド演習Ⅱ」授業アンケート

(15)2024年度「教職実践演習」授業アンケート

(16)「小中連携教育学」におけるプレゼンの提出

(17)「小中連携教育学」授業アンケート